

DANSE MACABRE

小岡明裕

あざけりとひきつりとぎらつく祝祭 三つの影が疎されて
いる小高い墳墓 いまもしたたり流れる血 いまだ来らざ
る時間の軋り 毬に乗った神の敗走 地割れに沿った火の
鞭ソーマの凱旋 たえまなく稲妻ふりそそぐ地平がある

寵姫の靴は、水っぽい夢の闇門が閉ざされたあと、黒い運河を疾駆する一頭の馬となる。大地を蹴っているのか馬の腹を蹴りあげているのか拍車をしきりと蹴り鳴らす男がひとり、ときおりフットライトに浮きあがってはまた消えるほかここには調馬師というものはいない。夜となく昼となく、運河に死ぬもの生きるもの、眼鼻の欠けた有象無象が拉し去られる無に突つ走る馬の行方を追ひ運河の始源へ果てしない探索のギャロップを急ぐ。黒い回想の水門をよぎり、現前の赤い架橋を潜って、白へ。ひと搔きの駆けぬけていく時間を包む没葉の皮肉の歌。それには誰も和してうたうが、闇にして素白の始源はいかなる讃歌もうたわせはしない。たとい疾走する脇腹にしたたるひとすじずつの汗にすら。

「(死は) (立ち) (はだかる) (もの) (では) (ない)」。ぶらさがってゆれている審問の声の重ね。羨望に充ちた奈落の道化師たちは旋風の綱の上ではぜ、火花のとんぼを切っている。馬が辿り着こうとしているのもあげくはそこなのである。白い泥絵具が照り映えているトーシューズ、その当惑の場所。めまぐるしく舞踏の道をゆずるアントルシヤの脱け殻。地軸がかしいでいるわけはない。それでも前へ前へとせり出し出すおれへ力へにおされ蛇行する河上へ、さらにみえない上流へ。ともすれば舞台の木橋のはねてしまったあとのそここは青い中洲にひとすじ朱

をひく徒花のみだらな陰画にすぎず、奈落の片隅にひしめく闇、その深みへかしいだ脚榻の片脚がゆめにうつつに閉じたりするのは猫足に穿く絹靴下によりそつて不壊の反古となる恋歌の盃感であろう、おかげで、張りつめた頭上にかきなぐるいななきの指先がとどかないまま老い衰えていく悪夢のつれづれも傾斜した台の上にさえいれればすっかり耐えられるという時間のからくりのためらう声。ふるえる声。かききえる声。

おお、途方もない白の世界が動きはじめるとしてもいうのか、いつなりとでも。憔悴した肉の光沢のなかに白い影をくまどつて神の愛の粘液のように息づかう骨。脚榻の十二対の骨は、遠い歎呼の息吹きにあえかにゆらく花々を血と慟哭の秘儀の原点から高々と青空のもと野辺の送りの白昼夢へと流出させるはおろか、砂となつて崩れては次々と背後に堆積する無量の時間の出口入口、そのうえにおちてははじける気狂いじみた輪舞の足踏み、虚妄の焰に包まれて暮れなすむ歴史の淀みのマドリガルさえ爪弾くことはない。はては、しめしあわせた混血の瓜二つ、踵のない履物の人目をほばかる暗箱へすべてはでたために急ぐほかない。自らの墓をうがちなおすべて然らずと口ごもりつつ。

みひらかれたままの眼球中天にかかり、肉、なべて仮死へ仮死へ。

道化師は九天から舞い降りる。

（――仮死へ、仮死へ。）スバークする空白の落差。栗毛の波うつたてがみに浮沈する鞍型宇宙の裏では、道化師の切ったとんぼの瑠璃玉世界に方舟の水夫が生まれるという筋書き。天体の碾白はまわり、砕かれる骨の音。はだけた水夫の三寸の胸先にあえぐ肋骨が掻き鳴らされ、八つ割

りの白紙の世紀の天井棧敷でブラボーの喉笛が切られる。連禱のギャロップのなかで剝り抜かれた馬は緞帳の裂け目に棒立ちそのまま波に呑み込まれ、湧きあがる喊声の泡には千年の蒼浪がおおいかぶさる。終末の岸辺をさぐり打つ千波万波についてあそこまでいってしまえるのはただ一艘の追放の舟と思うはしから、よせくる老いの惨劇の波また波をかきわけかわし、亡霊の踏み迷う雨脚を甲高い蹄にかけては、本流はずさず、疾駆する馬。弓なりの肉の魅惑よ。

（——仮死へ、仮死へ。）蹴散らされた泥の領土の根の歌は陽の堕ちた葦の茂みを戦がせている産声にくるみとられて岬の花道を闇の奥また奥へとゆるやかに転がって色褪せていく。空々しい沈黙のひとしきり、葦の剣に脱皮する昆虫の叡智が輝くばかり。駆けぬけ競いあうたばかりとたかぶりの軽業で靴の翼がはばたき、奈落の底では真つ白い布地が一枚、ひらひらと馬の鐙の辺りから河また雲の流れになってたなびいている。へことばだろうか。へ軍団だろうか。水平線で踊り子がひとりまどろみのように回転し、踝をしめあげている靴ひもが拍車にみえたとき閃くストロボライトが脚榻の横縞を切り裂くと、眉を落とした夏の記憶は——

（かつて、流れる時間の色糸は未来の市街図に徐々にみなぎる悪意さながら、歯咬みするいかなる馬の跑足をもからめとるものではなかった——）
記憶はすでに小舟にのって夜光虫にきらめく海を漂っていた。満天星々の不動のまたたき。砕かれ、おっこちてくる骨の音。輾転する天体の碾臼。

王は冥界から舞い戻る。

レヴァーサル！

幕間は蠕動する。炎がゆらめく不安のへりを目をあけたまま遊びすぎる馬。見おろす挿絵師は三

日月を背に利鎌のビュランを握りしめてかたずをのむ。鈴が鳴り花道を足早にのほつてくるものもなく、あまつさえ脇腹の傷を豎琴で隠して光る脚榻が己を開き鋭く空間を断ち切れば、たちまちビュランはなめらかにゆれはじめ。だが、曠野の一点で証しとなるべき脚榻はいまやとりわけ賢い骸骨となつてかぎりなく縮んで銅版の迷路のなかで永遠の身づくろい。鞭が唸り、現代の僭主ダイダロスはかくて飛び立つ、腸のなかよりためらいもなく。

メメントモリ！ 一陣のなまあたたい風が吹きすぎれば拍車は鳴る！ 艶めく脇腹の滝の飛沫で骨の仮面が洗われてしまうと、記憶の墓窖の水に馬はゆつくり浮上しはじめる。七色の藻にくまなくしつとりとからみとられた肉。踊り子は、踊り子はひとり、燦然たるアチチュード、素白の水平線にアチチュードビルエツト！ そのなせし行いによりそのまま迷宮の水晶のなかへ。スカラベは耀く。

カルナヴァル！ 貴婦人よ娼婦よ、女衞よ間諜よ、蟻よりも獯猛にして冷徹果敢な刺客よ蒲柳の王よ、吸血鬼よ聖人よ、とりかえばやとて死と生の……。おおヘルメース！ 軋む礪白、骨の音。

聖人は渾沌へ埋没する。

クオ・ヴァデイス？

砕かれている骨の音。

変形する神の時間の彩色影絵に十重二十重、囁語の封印をととのえるため、盲王の虚柩は馬の行く手に先立って石ばかりの土地へときぎだしたばかり。あわただしく洗われる貝殻骨。二千年の

前から洗われているデスマスク。へことば〜だろうか。遅延ばかりするオストラシスムよ！ 濁の刈り込みは漬いた水嵩が引いたころ、ようやく奈落の天井がひたひたと洗われる光りの波間で続けられているが、すでにビルエットもビュランも光る鏡に弾かれて馬のあとから運河をのぼる記述の数珠玉をつまぐる異象にすぎぬ。迷妄の祈りは杳い記憶の夜の海、白鳥が牽く太陽の舟を洗う緑の漣にあえぎながら溶けあっているが、そのようなとき、いったい誰に馬の意志を左右できるというのか。馬は遊び、駆けぬけていく。ぎらつくバックナールに吹きよせる風。へ軍団〜だろうか。放火人をあおり稲妻を走らせ、渦や運河の所々ちろちろと赤い火を燃えあがらせては白い布地を真紅の帯に裏返しつつ吹きつる風。それがさらに明け方の胸もとをしめつけていて、馬にはもうよつびて遊び駆けぬけるほかすべがない。

ここに、へおれ〜を放つたのは誰なのか。

碾白は骨を碾き、轆轤は旋回する。

刻々こねあげられていく粘土の脆く薄い肉に赤味をおびて宿りつつあるいのちのまったき形象のうちに、おお時間よ、おまえの輪舞は熄むこともなく――。

+

燃えあがるまえの日、凍結の前日、その日も処刑の大鎌は稲妻となつて沈黙の寒気のうちにくまなく地を走り、へ人類〜が刈り取られ、つづく日、海は凍って街は焼け運河は燃える。雷鳴は遠くから地上をたたき、大気はひび割れ、鷲は石のなかを翔ぶ。亀裂は頭蓋骨の岩を縦横に走り、宇宙の胎盤は裏返され、その日――おお！ いと高きにあげられし運河、至福のうちなる廢墟、栄光のテルタ、その荒廃と死と法悦の地平に――

サンクトゥス、サンクトゥス、サンクトゥス
 その聖三位の地平に
 グローリア！
 カラカラとたちあがる骨の大伽藍！
 ……
 まぶしい干潟に気を取り直した馬は、しらみはじめてまもない朝もやの地平へ、抗うべくもない
 幻影の彼方へ、こちらからあちらへと張り渡されたへことばの綱の確かな消去へと遊び、駆け
 ぬけていく。すべてを捨て、こと、さらに夢の歩調をこわしつつ。

le 7 octobre, 1986.

鏡城の食料相対して編み込む組織とすなわち問屋
 曲の音吟歌も五種心動を引替かたや音替死
 新日も天のつらさ。うはれ取置さ夫のつらさ
 嘘の中降臨の海を渡る音景の中空に見る一
 こませら其の容器をたたく。まをこ目を見おの
 舞念の中や代基織り交むる。菊のの取置
 種類の中や最も美しむもの地獄と魚である。菊
 味滑滑と取置音の中突入するこませらの取置
 大勢の音替



水調子 あらはれ
 egg tempera
 23.3×17.0cm